

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Session 3 : Amazon : Representation of Amazonian Shamanic Visions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003494">https://doi.org/10.15021/00003494</a>

## セッション 3 : アマゾン

# アマゾンのシャーマニック・ヴィジョンの表象

中 牧 弘 允\*

Representation of Amazonian Shamanic Visions

Nakamaki, Hirochika

- |                    |               |
|--------------------|---------------|
| 1 展示コーナーの構成        | 3 作品解説        |
| 2 シャーマニック・ヴィジョンの表象 | 4 フォーラムとしての展示 |

## 1 展示コーナーの構成

「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョン」のコーナーは3つのテーマに分けて構成された。すなわち「先住民のシャーマニズム」、「呪術師のシャーマニック・ヴィジョン」、「サントダイミ教」である。いずれもアヤワスカを摂取することによって生ずる体験を前提として展開するものである。アヤワスカによってもたらされる意識変容の体験は視覚にかぎらず、聴覚、皮膚感覚などにおよぶが、視覚に重点をおく展示の性格から「ヴィジョン」という用語をもちいている。アヤワスカとはケチュア語で「死者の蔓」を意味する蔓性の幻覚植物のことであるが、それからつくられる液体をさす言葉としても通用している。しかし、呼称は民族や教団によって異なり、ヒバロ(民族)ではナテーマ、マディハ(民族)ではラミ、コロンビアではヤヘ、ブラジルではジャグービなどの呼称をもつ。またその液体のことをブラジル・アマゾンで結成されたサントダイミ教ではサントダイミやダイミ、ウニオン・ド・ヴェージェタル教ではシ

\* 国立民族学博物館先端民族学研究部

**Key Words** : Pablo Amaringo, Amazon, shamanism, ayahuasca, halucination

キーワード: パブロ・アマリンゴ, アマゾン, シャーマニズム, アヤワスカ, 幻覚

ヤ（茶）とかヴェジエタル（植物）と呼んでいる。

幻覚剤は世界で100種類以上も知られているが、アヤワスカをはじめ、そのほとんどは中南米で使用されている。それは供犠やシャーマニズムなどの宗教的観念をともなうものであり、祭司やシャーマンなどの宗教的職能者の管理下で宗教的目的のために使われてきた。

アヤワスカの液体は実際にはすくなくとも2種類の植物からできている。ひとつは蔓性のバニステリオプシス・カアピ（*Banisteriopsis caapi*）であり、もうひとつは灌木のサイコトリア・ヴィリジス（*Psychotria viridis*）である。前者は木質の茎を、後者は葉を使用する。なぜなら、アヤワスカにはハーメインとかハーマリンなどの幻覚性物質が含まれているのだが、その効力は蔓自体にはほとんどなく、むしろ蔓をたたきつぶし、もうひとつの植物と混合した水溶液を飲むことによって生じるからである。それがスペイン語でチャクローナ、ポルトガル語ではシャクローナと呼ばれているサイコトリア・ヴィリジスであり、そこにはトリプタミンなど幻覚作用をもつ数種のアルカロイドが含有されている。トリプタミンは人工のLSDとよく似た分子構成になっていて、最近の有力な学説によると、おもに幻覚にかかわるのがトリプタミンであり、ハーメインやハーマリンはトリプタミンの効力を無効にするために発生するモノアミン・オキシダーゼを破壊する作用をもつといわれている。

アヤワスカの水溶液が体内に摂取されると、人間の意識を変成させ、いわゆる幻覚症状をひきおこすことになる。しかし、習慣性は無きにひとしく、依存症をひきおこす危険性は低いといわれている。ブラジルではアヤワスカを麻薬に指定すべきかどうかをめぐって、1980年代以降、マスコミや政府ならびにアヤワスカを儀礼的に使用する教団を巻き込んだ社会問題が生じた（中牧 1992a: 53-57, 2000: 206-210）。

これまでアヤワスカはアマゾンやアンデスの先住民社会において、見えない精霊の世界と交流するために摂取されてきた。デサナ（民族）のように、それを飲んで見るヴィジョンの体験から、「神話」のような物語を「現実」のものとして納得する役割りもはたしてきた（ライヘル＝ドルマトフ 1973: 214）。先住民社会以外の人びとにとっても、呪いや予兆をさぐる手段として、また前世や来世を知る手立てとして、アヤワスカのヴィジョンは希求の対象となってきた。

アヤワスカの製造方法、使用形態、また実際に使用する時の儀礼に関しては、先住民の各集団によってそれぞれ異なっている。他方、クランデーロと呼ばれる呪術師によって使用されるしかたも、クランデーロごとに差異がある。教団宗教になったサントダイミ教とかウニオン・ド・ヴェジエタル教の場合、それぞれの教義も儀礼の形態

中牧 アマゾンのシャーマニック・ヴィジョンの表象

も異なっている。

展示では「先住民のシャーマニズム」のコーナーでマディハのアヤワスカ（ラミ）製造過程を示す写真と解説にくわえ、「ラミづくり」のビデオ（約3分）を放映した。またアヤワスカの液体をいれるマルボ（民族）の土器製容器やセッションで使用され

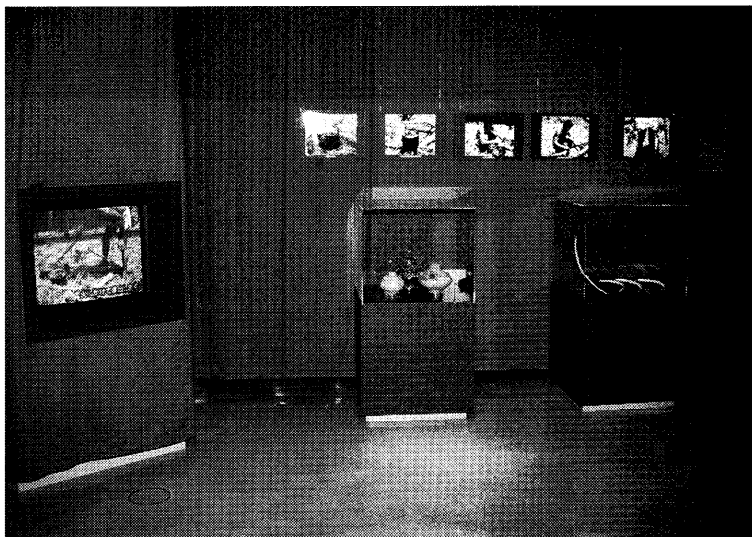


写真1 先住民のシャーマニズム



写真2 サントダイミ教

るマディハの笛や楽弓を展示した(写真1)。展示にもちいたマディハの資料はすべてブラジルのジュア川下流域のジュア先住民区に住む人びとが使用しているものである。

「呪術師のシャーマニック・ヴィジョン」のコーナーではペルー人のメスティン(混血の人の意)の画家で、呪術師としても活動していた時期のあるパブロ・アマリンゴの絵画を9点展示した。これが本稿の主題となっている。なお、展示場解説(後述)では「非先住民の元呪術師」とした。

「サントダイミ教」のコーナーでは儀礼服をまとった男女メンバーの人形を中心に、教団の十字架、賛美歌、マラカスなどを展示した(写真2)。

「越境」という展示のテーマに即していえば、アマゾンにおいて長い間使われてきたアヤワスカが先住民の社会を越えてペルー人とかブラジル人の間に広まっていき、さらに教団宗教の形態をとって都市部に伝播しつつある点を示すことに展示の意義が求められた(中牧 1999: 46-49)。

アヤワスカの「越境」は特に1970年代以降顕著になった傾向であり、ブラジルの都市部に広まった要因のひとつにはアマゾンの大規模な開発が深く関係している。その流れに乗って都市部の住人がアマゾンの奥地へはいりこみ、アヤワスカを使用する宗教——サントダイミ教やウニオン・ド・ヴェージェタル教——に出会うことになった。他方、日本の「精神世界」、欧米の「ニューエイジ」のようなあたらしい霊性を求めて、アマゾンの奥地で根づいた宗教に魂の癒しや救済をみいだそうとする人びとも増加した。その人たちの一部はアマゾンから都市部に戻って支部を結成するなど、新たな拠点づくりを開始するようになった。現在では、さらにヨーロッパやアメリカにつたえられ、また一部は日本にも伝播するようになっている。アマゾンのシャーマニズムはあたらしい形態をとって人びとの心をとらえ、アヤワスカの「越境」は現代社会にひとつの課題をつきつけている。疫病のアナロジーは誤解をまねきかねないが、アヤワスカの「越境」はエンデミックな風土病的な状態からエピソード的な流行病的な広がりを示しているのである(中牧 1992a; 2000)。

シャーマニック・ヴィジョンのアートは以上のような「越境」と同様の脈絡のなかで取り上げられている。パブロ・アマリンゴの絵画の構図は、彼がシャーマンの時に体験したさまざまなヴィジョンにもとづいているとされる。同時に、次章の永武ひかる報告にあるように、彼の展覧会は1986年以来、ストックホルムやニューヨークをはじめ世界各地で開催されてきた。日本でも同氏の尽力によっていくつか展覧会が開かれている。彼自身も1994年と1999年に2度来日した。アマリンゴの絵画はペルーより

も外国においてむしろ注目されているのである。

## 2 シャーマニック・ヴィジョンの表象

今回のシンポジウムの目的に沿って少し説明をくわえると、まず最初の点は、民族文化を表象する際になぜアートを選んだかについてである。シャーマニック・ヴィジョンのような主観的で感覚的な視覚認識を展示するのはきわめて困難である。従来のシャーマニズムに関する展示では、シャーマンの使用する道具、身に着ける衣装、太鼓や笛のような楽器、ガラガラのような小道具、精霊の彫像、幻覚性植物の見本やそれを保管する容器などをならべることによってシャーマニズムの世界を示してきた。もちろん写真やビデオなどが儀礼などの外観を示す有力な手がかりとなっていた。その意味で、今回の「先住民のシャーマニズム」のコーナーはその域をでるものではなかった。

しかしながら、シャーマニズムの核心的な部分はトランスにあり、その時に神がかりの体験をしたり、あるいは恍惚的な境地に入ったりすることがおおきな意味をもっている。また同時に、シャーマンはさまざまな精霊を操作するといわれている。そういうことが口で語られ、文章にも書かれるけれども、それを展示で表現することは困難をきわめる。その点、シャーマニズムの特異な体験を絵画に表現したものはひとつの突破口となりうるとかんがえられた。もちろん、これまでもそうした絵画や彫刻が展示されてこなかったわけではなかった。だが、パブロ・アマリンゴの絵画は具象的なイメージと極彩色の色づかいに特徴があり、トランス体験の表現形態としては群を抜く作品のようにおもわれた。それを効果的に使用すれば、トランスの視覚化と越境するシャーマニズム的な世界を同時に表示できるのではないかと期待された。つまり、パブロ・アマリンゴの絵画はアヤワスカの体験を描写している稀有な例であると同時に、美的鑑賞にも十分堪えうるものである。しかし、それ以上にトランス体験の動的表象として活用する価値があるようにおもわれた。

アヤワスカ体験をイラストで表現したものとしては、サントダイミ教での体験に関するものがある。そこでは神が「顔」としてあらわれ巨大化し、作者は「力のぬけた甘美な軽さのなかでの静寂と光輝」につつまれた（中牧 1992b: 27-28）。ブラジルとコロンビアの国境地帯に住むブラジル側のトゥカーノ（民族）のえがいた絵画作品のなかにも、シャーマンの吐き出すタバコの煙とともに幻覚体験のなかで見たシャー

マニック・ヴィジョンを描写したものがあつた。これはサレジオ会の神父がトゥカーノにえがかせたものである。しかし、それらはトランス体験の断片であつて、動的ヴィジョンを表現するのにふさわしい作品ではなかつた。

実際、アヤワスカのもたらすヴィジョンは夢のようにたえずうごいている。それは写真のような静止画像ではなく、映画のような動的画像である。したがつて、トランス状態のヴィジョンを疑似的に追体験するためには、静止画よりも動画がのぞましい。アマリンゴの構図には静止画でありながら動画のイメージが多分にもりこまれている。そこにシャーマニズム展示の活路をみいだそうとして、後述するようなコンテンツ作成にとりかかつた。

ところで、アヤワスカ体験が豊富で熟練したシャーマンになるとヴィジョンをコントロールできるようになるという。しかし、一般的には自分の意図とは関係なくヴィジョンが展開する。酒に酔つて記憶を喪失するのは異なり、トランス状態でも意識は鋭敏に覚醒しているのだから、そのヴィジョンを鮮明に記憶しておくことは可能である。したがつて、過去の記憶にもとづいて絵をえがくということは十分ありうることである。アマリンゴの作品は画家のイメージーションをキャンパスに表現したというよりも、彼のアヤワスカ体験に画家のイメージーションを加味したというほうが的を射ているであろう。

もつとも、アマリンゴの作品がアヤワスカ体験のヴィジョンをそのまま表現しているかどうかは別の問題である。たとえば大蛇とかジャガーはアマゾンの森や川のたたずまいのなかにかきこまれているが、ヴィジョンではかならずしもそのように見えたわけではないだろう。それゆゑ、ひとつの美的な表現のなかにはシャーマニクな世界がどのように表象されているかが次に問題とされなくてはならない。

まず最初に注目されることは、アマリンゴの絵にはかならず儀礼の場面がえがかれている点である。それはアヤワスカのセッションの様子である。アヤワスカをいれる壺があり、人びとを癒している場面が描写されている。アマリンゴによると、文化人類学者のルイス・エドワルド・ルナにすすめられて、セッションの場面をかならず挿入しているのだという。また、実際に筆をとる時、「精霊の神話的变化」ではセッションの場面から描きはじめたと国立民族学博物館の研究会では語っていた。

第2の特徴は、ふつうは目に見えない精霊の世界が具象的にかきこまれている点である。木はたんなる幹や枝や葉の合体したものではなく、アヤワスカの母やインカの精霊をやどしている存在でもある。目には見えない世界がアヤワスカを飲むことによって見えてくる。そういう場面がふんだんに描写されているのがひとつのおおきな特



質といえる。

第3に、一種の「曼陀羅」的な構図を指摘できる。たとえば善なる精霊と悪の精霊が抗争するという構図もあれば、森の世界と水の世界を対照させながらえがいているものもある。特定の構図が定まっているわけではないが、アマリングに特有の世界が表現されている。そこにはアマリングのオカルト的な知識にもとづいたものもあれば、インカの神話的世界の表象もみられる。また彼は色にさまざまなシンボリズムをこめることもあれば、キリスト教やフォークロアのテーマをもちこんでいる。

最後に、アマリングの絵画制作にはシャーマニズムの研究者が深く関与している点があげられる。呪術師の活動をやめてから、絵の制作に取り組むようになったのは、先述のルイス・エドワルド・ルナと生化学者のデニス・マッケナにすすめられたからである。シャーマニズム研究者がアマリングに絵筆をとらせ、その作品を世界に広めるエージェントの役割りを果たした。彼らは学会でアマリングの絵画についての報告をするだけでなく、アマリングをともない講演会などの場において彼の口をとおして語らせている。また美術館や博物館がパブロの絵を展示するとともに、彼を招いて講演会などの企画をおこなっている。永武ひかるのようにNGOの活動をとおしてアマリングの絵画学校を支援するというようなこともなされてきた。このように研究者や美術館の介在によって、バルー・アマゾンの一介の呪術師が世界的にも有名なシャーマニック・ヴィジョンをえがく画家に変貌していったのである。ちなみにアマリングの絵の才能は肖像画や風景画をえがいて小遣い稼ぎをいた頃に開花し、ささやかな贖金づくりをしていた時に磨かれたと推測される（永武 1998: 131-132）。

### 3 作品解説

パブロ・アマリングの絵画を国立民族学博物館は9点所蔵している。それらはすべて特別展で展示されたが、最初の構想と実際の展示との間で生じた若干の問題について述べることにする。

まず、8点の作品はふつうの美術館展示のように垂直につるしたが（写真3）、縦144cm、横197cmの大作「精霊の神話的变化」は実験的に水平に置いてみた（写真4）。というのは、先述のようにこれを一種の「曼陀羅」としてみる場合、砂絵曼陀羅のように四方から間近に見れるようにしたらどうかとかがえたからである。作者は水平に観賞されることを予想して構図を決めたわけではないが、床面から60cmほどの高さ

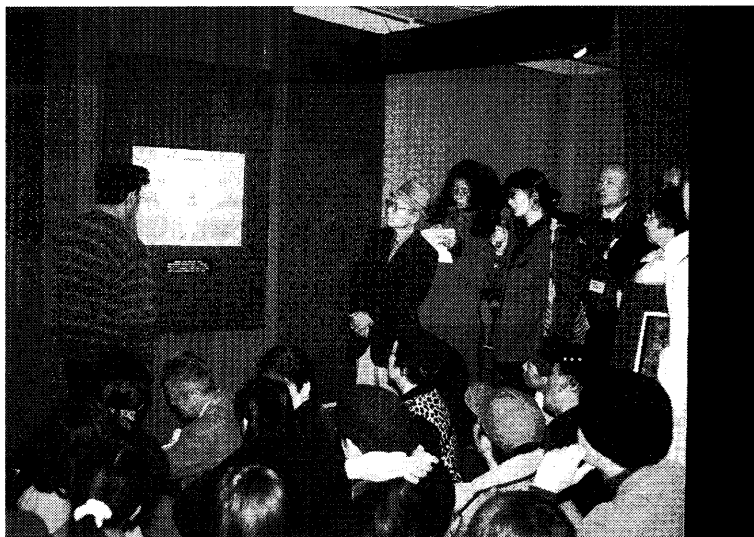


写真3 パブロ・アマリングによるギャラリートーク

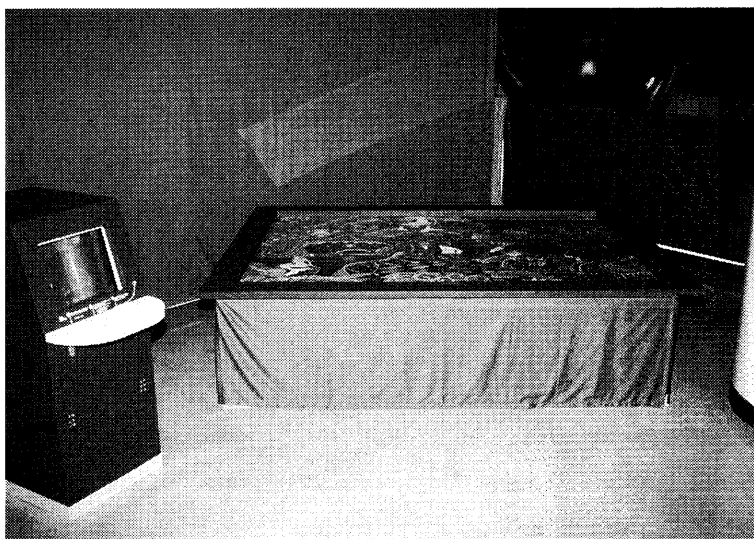


写真4 「精霊の神話的な変化」とモニター

に固定し、上からのぞきこめるようにした。この展示方法に関し、作者からも来館者からも特にクレームはつかなかったが、積極的に肯定する声も聞こえてはこなかった。

解説文に関しては、当初、概説「呪術師のシャーマニック・ヴィジョン」(下記)ならびに個々の絵画のテーマと作者名だけを文字情報として提示した。というのは、「精

「霊の神話的变化」の近くにCGをとりこんだ解説用のモニターを1台設置したからである(写真4)。しかし、オープンしてからそれだけでは解説が不十分であることが判明した。なぜなら、来館者は個々の作品の解説をその場で必要としていたからである。アマリンゴの構図は象徴的な意味に満ちていて、一見して理解できる性格のものではない。モニターにたどり着く前に人びとの疑問にこたえることは、当然の要請でもあった。こうしてくわえたやや長めの解説を以下に提示しておく。これは次章に掲載されている、アマリンゴから直接聞き書きした永武ひかるによる詳細な解説を参照して作成したので、比較のために例示しておく。なおパブロ・アマリンゴの人生や世界観、作品やその解説については、関連の著作(Luna and Amaringo 1991; アマリンゴ・永武 1998)をあわせて参照されたい。

#### ・呪術師のシャーマニック・ヴィジョン

パブロ・アマリンゴ(1938-)はペルー・アマゾンの非先住民の元呪術師である。呪術師は病気の原因をさぐり、病人を治療する。そのとき、アヤワスカとよばれる液体をみずからも摂取し、また信者にも与え、集会のなかで癒しをこころみる。アマリンゴは文化人類学者の求めに応じ、自分で体験したシャーマニック・ヴィジョンを絵画に描くようになった。その絵のなかには、アヤワスカの入った壺をかこんでおこなわれる集会、病人の失われた魂を求めて空中飛行をするシャーマン、動物の姿をした善と悪の精霊の戦いなど、水と森の世界を舞台にくりひろげられる神秘的な世界が一種のマンドラのように描きだされている。(展示場解説)

#### 1 シャーマンの飛行 パブロ・アマリンゴ作 1997

高位のシャーマンはアヤワスカを飲むと霊的な身体となって空中を飛行する。その身体のまわりに輝く光輪はシャーマンの霊力をあらわし、はてしない宇宙への飛行によって過去、現在、未来を見るといわれている。飛翔感はシャーマニズムに特有の感覚でもある。(展示場解説)

#### 2 母なるアヤワスカ パブロ・アマリンゴ作 1994

作者の見たヴィジョンのひとつでは、アヤワスカは古代エジプトの女帝だった。虹の髪飾りと紫の衣を身に着け、胴はアヤワスカの蔓で、足は大地とつながっていた。そのアヤワスカをまもる、生物の姿をした精霊たちも描かれている。右側の植物はチャクルーナで、その葉をアヤワスカと混合することによって、ヴィジョンが見えるようになる。(展示場解説)

#### 3 地中のシェルター パブロ・アマリンゴ作 1991

シャーマンは、猿や鳥たちを使って攻撃をしかける悪い呪術師からのがれるため、弟

子や患者を連れて、地中の奥に身を潜める。シャーマンは治癒力を示す白いオーラを発し空中に浮かんでいる。入口をかためるのは狩人の先住民であり、毒ガエルや敵の槍をすばやく奪う猿もシャーマンの儀礼をまもっている。(展示場解説)

#### 4 黒アヤワスカ パブロ・アマリンゴ作 1989

黒いアヤワスカは幻覚作用が強く、偉大なシャーマンだけがそれを乗りきることができるとされる。ヴィジョン自体も黒か、黒い青や紫であるという。霊界の長ケセルが中央上部で輝きシャーマンの活動を支援する人魚や動物たちも暗黒色で描かれている。(展示場解説)

#### 5 魔法の塔 パブロ・アマリンゴ作 1991

作者の見た魔法の塔には霊界の長老たちが住んでいて、霊性が豊かで謙虚な人たちだけが入ることを許される。偉大なシャーマンや霊的な人たちは、サファイアの衣服をまとった天使たちに迎え入れられ、霊的な交流がくりひろげられる。塔は真珠で、柱はダイヤモンドである。(展示場解説)

#### 6 精霊の力 パブロ・アマリンゴ作 1997

シャーマンは患者に息(タバコの煙)を吹きかけて活力を与え、助手はアヤワスカに息を吹きかけヴィジョンが明確になるようにしている。シャーマンの背後の森にはシビボ族の男女の顔が見え、上方にはインカの人々がいる。空からは霊的な人物が電磁気の波をぬって降りてきている。左側は聖者たちの住む聖域である。(展示場解説)

#### 7 アヤワスカの聖性 パブロ・アマリンゴ作 1997

左右両側に白とピンクの花をつけたアヤワスカの蔓が描かれている。チェス模様の上にシャーマンがひざまずき、左右にチャクローナの灌木が大地に根を張っている。シャーマンの後ろの箱からは宇宙のエネルギーが放出され、思慮ぶかい男女を通じて科学が発展するという。上方の三角形は愛、叡智、公正をあらわしている。(展示場解説)

#### 8 海の精たちの電磁気 パブロ・アマリンゴ作 1995

アヤワスカのヴィジョンで作者は海の精たちを見た。人魚のような女精たちは海中の宮殿に住み、楽器をかなでて歌に興じていた。緑色の髪をしているのが王女である。そこには磁力を帯びて振動するスクリーンがあり、地球や宇宙のあらゆることを過去、現在、未来にわたって見ることができる。上方の蛇たちは雲の中をゆきかい、シャーマンにアマゾンの知識を教えてくれる。(展示場解説)

#### 9 精霊の神話的な変化 パブロ・アマリンゴ作 1998

霊力のあるシャーマンが頭から火をふき患者の治療にあたっている。その下にはサツ

チャママ（森の母）という大蛇が描かれている。それは川にすみかを移すとヤクママ（水の母）となり、船に変わることもある。川イルカが長身の魔性の女性に変身し、古代都市アトランティスに向かって歩いている。古代都市の隣には白い眉と髭をもつ、公正をつかさどる王がいる。その上方の白髪白髭の賢者と風の女精2人はそれぞれ靈感と精神集中をもたらしてくれる。賢者の左にはトゥカーノ鳥のような人間がいて、呪いにかかった人を救済する。右上方のカワウソや右下方の黒いピューマは牙をむき出し、シャーマンの儀式をまもっている。ピューマの上には白いくちばしをもった青い粘液マリリが描かれている。マリリもシャーマンをひそかにまもってくれる存在である。中央のアヤワスカの蔓、中央下の「象の耳」、右上のパパストルエノなど、シャーマンが使う薬草も描写されている。（展示場解説）

以上の解説パネルにくわえ、先述のようにスタンドアローンのコンピューターを使用し、モニターで解説映像を提供した。そのコンテンツはソニー PCL と共同で作成し、導入部の解説の後、「シャーマンの世界」、「精霊の世界」、「癒しの世界」という3つの扉を開くと、それぞれの解説が絵画の部分映像をともなって聞けるようになっていた。バックグラウンド音楽はシンセサイザーで作成された。当初の構想ではコンピューター・グラフィックスを駆使して次々とうつりゆくシャーマニック・ヴィジョンをパプロ・アマリンゴの構図を素材にして展開しようとした。たとえば、川イルカが人魚や女性に変身したり、大蛇が川船に変貌したりする映像を構想した。また、大蛇や精霊にうごきをくわえてもみたかった。しかし結果としては、UFOをうごかしたり、ロウソクの炎をゆらめかせたり、シャーマンが息を吹きかける程度のことしか実現できなかった。コンピューター・グラフィックスの映像制作にはかなりの資金を必要とし、許された予算の範囲では十分満足のいくものはできなかった。

## 4 フォーラムとしての展示

最後に、この展示コーナーでどういう来館者の反応があったかについてふれておきたい。特別展示場の出口で感想を自由に書いてもらったが、そこには「きれいだった」というぐらいのことしかなかった。しかし、来館者の中にはアマリンゴの絵に手をかざしてみたり、あるいは手を広げて絵からパワーを受け取るというような行動をとった人がいたようである。美術館には仏像にお賽銭をあげる人がいるけれど、絵から神秘的な霊力を感じ取ろうとする人たちはいわゆる「精神世界」に関心をいだき、それ

を实践する人びとではなかったとかがえられる。ある高校の美術教師も絵と接した時の神秘的な感動を手紙にしたために送ってきた。そういう意味では、アマリンゴの神秘的作品はいささか特異な絵なのかもしれない。

パブロ・アマリンゴ氏を当初はギャラリー・トークのために招聘する予定はなかったが、永武ひかる氏の尽力により、東京方面の講演会と合わせて国立民族学博物館でもギャラリー・トークが実現した（写真3）。また、このシンポジウムのプレ・シンポという形で研究会も開催できた。

なお、シンポジウム報告の最後にNHK「新日曜美術館」のビデオを見せた。それは1999年12月5日に放映されたもので、パブロ・アマリンゴのギャラリー・トークを中心にまとめた紹介番組である。

## 文 献

- Luna, Luis Eduardo and Pablo Amaringo  
 1991 *Ayahuasca visions: the religious iconography of a Peruvian shaman*. Berkeley: North Atlantic Books.
- 中牧弘允  
 1992a 「茶を飲まずば幻覚をえず——ブラジルにおける幻覚宗教の疫学」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学1 宗教体験への接近』pp. 31-59, 東京: 東京大学出版会。  
 1992b 「はじめに液体ありき——ブラジルにおける幻覚宗教の創世記」中牧弘允編『陶酔する文化——中南米の宗教と社会』pp. 19-49, 東京: 平凡社。  
 1999 「アマゾンのシャーマニック・ヴィジョン」中牧弘允編『越境する民族文化』pp. 46-49, 大阪: 千里文化財団。  
 2000 「エビデミック化するアマゾンの幻覚宗教」総合研究開発機構・中牧弘允編『現代世界と宗教』pp. 197-212, 東京: 国際書院。
- パブロ・アマリンゴ（語り）・永武ひかる（構成・訳）  
 1998 『アマゾンの呪術師』東京: 地湧社。  
 ライヘル＝ドルマトフ, G  
 1973 『デサナ——アマゾンの性と宗教のシンボリズム』寺田和夫・友枝啓泰訳, 東京: 岩波書店。